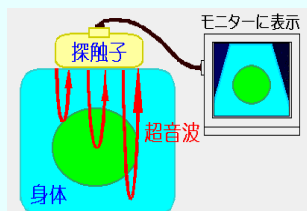


腹部超音波検査

超音波は密度が異なった物体の境目で反射します。これを利用して、超音波をおなかの中に発射して、反射波が戻って来るまでの時間と反射波の強さをコンピューターで自動計測し、臓器や組織などの場所と形を画面（VDT）に写し出すようにしたのが超音波検査です。超音波はまったく無害ですし、数分間横になっているだけで苦もなく検査を受けることができます。



超音波検査では超音波を発射する探触子を身体に当て、身体各部分から反射して戻ってきた超音波を測定します。

この時、超音波の戻ってくるまでの時間と強さの情報をもとに身体内部の超音波像を合成することによって、モニター画面上に画像を表示させるので、超音波の反射が少ないとその部分の画像は暗く（黒く）写り、反射が多いと明るく（白く）写ります。

腹部超音波検査で見える臓器

この検査では、画面で肝臓、胆嚢、膵臓、脾臓、腎臓、副腎などの臓器と、血管やリンパ腺、時には胆石、腎結石やがんなども見ることができます。心臓、肺、胃、腸、筋肉、脂肪などは、見ることはできませんし、ときにはこれらが邪魔して見たい臓器がよく見えないこともあります。太っている人では超音波が深いところまで十分届かず、分かりにくいことがよくあります。また、空気が溜まった胃が膵臓の上に被さったようなときには、空気は超音波を通しませんので膵臓がよく見え、検査が不十分になることがあります。

KKCの判定及び所見

KKCでは下表のように5段階で判定しています。

判 定	解 説
異常所見なし	異常所見を認めず、1年後の健診（ドック）受診でよいもの。
有所見健康	所見は認められるが、症状がなければ1年後の健診（ドック）受診でよいもの。
要経過観察 (3, 6, 12ヶ月内再検)	経過観察を要し、3, 6, 12ヶ月以内のいずれかに再検査が必要なもの。
治療中・ 経過観察中	すでに医療機関で治療中、または経過観察中のもの。
要精密検査	異常所見を認め、精密検査が必要なもの、または治療を要するもの。

超音波検査で見られる主な所見を説明します。

臓器	所 見	解 説
肝臓	脂肪肝	肝臓に脂肪がたまりすぎた状態です。脂肪は超音波をよく反射するため、肝臓が通常より白っぽく見えます。食べすぎや飲みすぎが原因です。
	まだら脂肪肝	腸から血管を通じて肝臓に運ばれてきた栄養が、脂肪となって血管の近くからたまるため、脂肪の多い場所がまだらに見える状態です。白っぽく見えるがんなどと紛らわしい場合があります。
	慢性肝炎・肝硬変	肝臓全体の病気なので、分かりにくいことがあります。肝硬変が進むと肝臓が萎縮し、表面が円滑でなくなります。
	のう胞	肝臓の中にできた袋で、液体が溜まっています。多くは円滑な球状です。直径5～10cm以上なら、まれに破れることもあります。大抵は無害です。
	肝血管腫	毛細血管が毛玉状の塊になったものです。大抵は放っておいてよいのですが、大きくなったり、まれに悪性（血管肉腫など）の場合がありますので、多くの場合、「要経過観察」と判定されます。
	肝腫瘤	悪性であることが多く、良性と判断される場合以外は精密検査が必要です。

臓器	所見	解説
胆のう	胆のう壁肥厚	胆嚢炎や腫瘍などで胆嚢の壁が分厚い状態ですが、異常でないこともあります。
	胆のう腺筋症	胆嚢壁の中に細かい結石や水疱があって、壁が分厚くなっている状態です。多くはタチの悪いものではありませんが、治療が必要になることもあります。
	コメットサイン	ポリープや胆嚢壁に埋まった結石に超音波が当たって、その後方に超音波の影が彗星のように尾を引いて見える現象です。心配は要りません。
	胆石	いくつかの種類があり、胆石溶解剤で溶けないものが多いようです。大抵は無症状ですが、痛み発作や黄疸が出れば手術を要することもあります。
	デブリ（胆泥）	胆汁が泥状になったもので腸に排泄させる治療を要することがあります。
	胆のうポリープ	大抵は良性で放置してよいのですが、大きいものは手術を要することもあります。
	総胆管拡張	総胆管（肝臓から十二指腸に通じる胆管）が結石やがんで胆汁の流れを塞ぎ止められて拡張した状態です。しばしば黄疸を伴います。
脾臓	脾管拡張	脾液を通す管ががんや脾炎で脾液の流れが滞り、拡張した状態です。塞ぎ止める原因がないのに自然に拡張している場合は、心配要りません。
	慢性脾炎	慢性肝炎と同様、この検査では診断が難しいことがよくあります。胆石が総胆管と脾管の合流部で詰まったり、お酒類を飲みすぎて起こることがあります。
	脾のう胞	脾臓の中にできた袋で液体がたまっています。タチの悪いものもありますので、経過観察や精密検査が必要です。
	脾臓－異常所見	脾腫瘍が疑われる状態です。精密検査が必要です。
脾臓	脾腫	肝硬変で脾臓から肝臓へ通じる血管の流れが滞ったり、溶血性貧血などで壊れた赤血球を処理する機能が高まって、脾臓が大きくなった状態です。
	副脾	脾臓の小さな飛び地です。生まれつきのもので心配要りません。
	脾臓－異常所見	きわめて稀ですが、脾腫瘍が疑われる状態です。精密検査が必要です。

臓器	所見	解説
腎臓	重複腎盂	生まれつき腎臓に腎盂が2つあるものです。心配要りません。
	馬蹄腎	生まれつき左右の腎臓が繋がって馬蹄状に見えるものです。心配要りません。
	腎結石	腎臓にできた結石です。尿管に流れると激痛を起こすことがあります。
	水腎症または水尿管	尿管に詰まった結石で尿が塞ぎ止められて、腎盂や尿管が拡張した状態です。
	腎のう胞	腎臓の中にできた袋で、尿がたまっています。直径10cm以上にも大きくなったり痛みが生じなければ、放っておいて差し支えありません。
	腎臓－異常所見	腎腫瘍が疑われる状態です。精密検査が必要です。

事後措置が大切！

腹部超音波検査ではさまざまな所見が見つかります。KKCの人間ドックでは、次のような所見がよく見つかっています。

	出現する割合	
	男性	女性
脂肪肝	27.7	10.0 (%)
肝のう胞	13.3	14.2 (%)
肝血管腫	3.6	5.2 (%)
胆のうポリープ	15.7	11.1 (%)
胆石	3.7	3.4 (%)
腎のう胞	14.1	7.3 (%)
腎結石	9.2	6.1 (%)
肝腫瘍の疑い（肝血管腫を除く）	0.6	0.4 (%)
	—（平成25年度）KKC集計より—	など

これらの所見のどれかが見つかった場合、結果通知書にその後の対処の仕方が記載されていますので、それに従ってください。

腫瘍らしい所見は稀ですが、もし見つかった場合はすぐに医療機関を受診することが大切です。